

「人生は出会いで決まる」とフーバーは述べました。人生の方向を変えてしまう出会いというものは、本当にあるものなのです。ある人との出会いは、心を明るくし、生きることを楽しくしてくれるものです。

私も青年時代のある日、すばらしい出会いをしました。その当時はむなしさ、憎しみ、不信感で心はまっくらでしたが、その1回のお出合いが私の人生を一変してしまいました。まだおめにかかったことのないアナタと、この小冊子を通して出会うことができるのを、心から喜んでいきます。

どうぞアナタも、同じように、すばらしい出会いを体験して、しあわせな人生を歩む方の1人になってくださいますように。

目次

- 人生は一回です
- 逆三角形
- 聖書が教えること
- 愛してくださる神
- 愛される世
- 神が与えられた御子（キリスト）
- 信じる人におこる事
- このいのちを持った方は
- この豊かないのち、永遠のいのちを、信じ受け取りたい、と思われる方のために

人生は一回です

そして、くり返しがききません。ですから人の一生、というのです。「彼は、いま、二生目だけど…」なんていうのはないでしょう。あたりまえさ——まあ、そうですね。自然好きな日本人は、この人生を自然にたとえることが多いようです。人生の夜明け、人生の山坂、嵐の中の歩み、などはよく使われます。晩年なんていうのもそうですね。日本は北半球に位していますから、春夏秋冬の四季が廻ってきて、それぞれの趣きを味わわせてくれています。それで人生にもそれをあてはめて、青春時代とか人生の秋、などということになるのですが、自然界でのくり返しは人生にはありません。冬枯れの木立ちは、春の到来と共に萌え立って、目にまぶしい若葉の初夏を約束してくれますが、人はそうはいきません。春は一同、夏も一同、そして、秋を迎えて、永眠の冬になる、すべてが一回性のくり返し不可能なものなのです。

そして、その一生は、案外、早くすぎてしまうもののようです。これを書いている私が人生の四季のどこを通過中かは、しばらくおあずけにしておきましょう。（私が先年お目にかかったアフリカのガーナの牧師さんは、初対面の時、私を二十七才だと思った、と言っていました。ま、そんなことはどうでもよいのです）

その一生は、無数の、と言えるほど多くの選択の連続でできています。人は、一時点で一つの事しかできません。ですから、何をその時にするか、をえらばなければならなくなります。その選択の連続が一生を形成してゆくのです。

あなたも私も、けさからいままで（いま、という時を午後のひと時と仮定すれば）、ずいぶんたくさんの選択をしつづけてきたのです。お気づきでしたか？いや、ほとんど無意識にされる選択が多くあったので、気がつかずに時が過ぎたのかもしれませんが、えらびつづけてきた事実は、やはり変わりません。

先ず、朝、目がさめました。人はその日の第一の選択に直面したのです。「起きるべきか、起きざるべきか、これ、わが人生の課題なり。」ということなのですが、ある方は、ハムレットなんか気取っちゃいられないよ、起きなきや会社におくれちやう…と跳び起き、馳けだされたことでしょうか。それこそ、サラリーマン人生の醍醐味か悲哀か――。

学生諸君などは、「オッ！朝だ！ナンダ!?朝か、一朝はアサネの時よ…」と、そのまま静寂の時の流れに身をゆだねて、やっと、この午後のひと時におめざめで、ということかもしれせん。

出勤、登校の途中でも、電車はどの入口から乗るか、階段はどっち側を行くと効率がいいか、などを選択したり、お昼になると、「おい、きょうは何くう？」とか「アナタ、何にナサル？」なんて、表現は様々ですが、たくさんの選択をしつつ日を過すのであります。

人生に大きな影響をもたらす、時には転換さえももたらすような重大な選択に直面する時もくるのです。

大学受験―どこをうけるか？（どこに入るかはひとりでは決められません）

就職―どこにつとめるか？（採用、不採用は人事課の決定で、これも自分では選べませんが。）

結婚―誰と一生を共にするか？これまた相手のあることで、ますます決定はむずかしいことになります。）

大・小にかかわらず、人はえらびつづけなければなりません。

そこで、「選択の原則」を知っておくことにしましょう。それは、こういうことです。「人が選ぶのは自由だが、選んだ事の結果はもう選ぶことができない。」

ある人が言いました。「ルーレットに賭ける前にはよーく考えろ、賭けて、廻り始めたら、ヤキモキしても、ムダだよ」。

朝の通勤電卓の中で、しきりに時計をにらみながら、ひたいに八の字をよせている人を見る事があります。え!?けさのあなた？、それはどうも、――あれは、全くムダな心労です。

乗った途端に、その電車の目的駅到着時刻はまずは決まっているのであって、遅刻するかどうか、もう決まっているのですから。

選ぶものはたくさんあります。しかし、人生の方向を決定するような大きな選択もあるのです。

お買物の選択も大事ではあります。大根か人参か、魚か肉か、ライスかパンか、コンソメかポタージュか、それも大事でしょう。

けれど、人生のある一面を認めてかかるかどうか、目に見えない世界の現実を認識するかないか、というような選択は、豊かな人生を生きる上での基本的な選択なのです。

逆三角形

人間の生活には必ず三つの面があります。その三つの面を三角形であらわしてみることにします。そして、三つの面に、便宜上、番号をつけておきます。

ふつう、三角形をかいてください、と言われれば、もっと安定した山形にかくものだと思いますが、このかき方（逆三角形）は、それなりに意味がありますので、こうしておきます。

さて、この三面につけてある番号に従っておのおのの面があらわしていることをご説明いたしましょう。

③は、物に対応する生活面だと思ってください。衣・食・住は当然ここに含まれます。つまり、生存それ自体の必要面でしょう。

②は、人に対応する生活面です。要するに対人関係です。これがうまくゆけば、人生はたのしくなり、この面が崩れますと、家庭が地獄になりかねませんし、社会は、それこそ生きにくい場所となり「とかくうき世は住みにくい」という事になりますね。

①は、ここまでの二面ではふれていない面ですが、その内容は、もう少しあとで考えることにしたいと思います。

戦後30年、とよばれる一世代の間に、この日本で何がおこなわれてきたか、を考えますと、まずは、この第三面、物質的繁栄を求めて、全力投球をしてきたと言えるのではないでしょうか。

焼土と化した日本—その表現通りに荒れ果てた日本の土地に、再建の槌音がひびき出してから四半世紀、日本は列強の諸国が、あれよ、あれよとおどろいている間に、GNP第二位の工業国になっていました。もちろん、この再建活動に具体的にかかわってこられた先輩の方々は、「なっていた、だと!?!とんでもない。われわれの涙と汗で築いてきたんだぞ!」とおっしゃることでしょう。そうでしょう、そうなのです。まさに現在の日本は多くの方々の涙ぐましい努力の結果なのですから、その事実を忘れてはなりません。「先輩! ごくろうさんでした!」と頭を下げなければなりません。

だけど、だけど、だけど、なのです。それはほんとうなのですが、こうして築き上げられた物質文明の豊かさの中にいる現代日本人は豊かに生きているのでしょうか? 「豊かさの中の人間が豊かに生きているか? だと? キミい、何を言っとるんだ! あったりまえの事をきくもんじやないよ!」とおっしゃる方は、どうも年々減っているようです。むしろ、じ

っと目をつぶり、「あれほどの努力をして築き上げたこの社会に生きている人々がこんなにもむなしく、これほどまでもすさんでいるなんて一体、どこがどうなっているのだろう？」と考えこむ人の方がふえつつあるのです。

ある社会評論家を書いておられたのを読んだことを思い出します。現代人が感じている問題、あるいは、なやみが四つある。それらは、むなしさ、孤独感、罪責感、そして、個人的な死に対する恐怖心である。これらは、文明、文化の程度が向上するにつれて、減少するどころか、かえって増加して行く、というご意見でした。たくさんの方々にふれてみて、ほんとうだ、と思わせられるのです。

あるとき聞いたお伽話にこんなのがありました。

「昔々ある村に、貧乏なおじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんが村はずれの一軒家のそばを通りかけると中から不思議な音が聞こえてきました。ガッタン！チャリン！ガッタン！チャリン！木がぶつかる音と澄んだ金属音です。おじいさんはその家に近づいてかべ穴からのぞきました。するとそこには一匹の鬼が下駄をはいて、木の床に立っているのです。そして、突然、うしろ宙返りをしたのです。げたは木のゆかにぶつかって、ガッタン！、すると、そのげたの歯の間からチャリン！とすんだ音を立てて金貨がころがり出しました。これで、さっきの音の秘密はとけました。げたがガッタン一金貨がチャリン！おじいさんが息をころして見ているうちに、その鬼は、金貨が必要なだけ出てきたのでしょう、金貨をふところに入れると、げたをそばの引き出しの中に、大切にしまって外へ出て行きました。おじいさんば、鬼が遠くに見えなくなると、その家にしのびこみました。引き出しをあけ、げたをふところに入れると、一目散。

「おい、ばあさんや、きょうは、すんばらしいものを見つけたダゾ！これでもう貧乏生活とはおさらばじや……」

びっくりこけているおばあさんの目の前でおじいさんは鬼のげたをはきました。おじいさんのやせた体は宙に舞いました。ガッタン、チャリン！ガッタン、チャリン！床の上には金貨がころがり出したのです。

こうして、二人は貧乏ぐらしから脱け出しました。しかし、二人とも気がつかなかったことがありました。それは、そのげたの横に字が書いてあったことでした。それは、こう言っていたのです。「このげたをはく者は、小さくなる。」

たしかに、おじいさんば、だんだん小さくなって行きました。ある日、そのことに気づいたおばあさんは言いました。「おじいさんや、もうやめなされ、これ以上ちいちゃくなったらどもならんがナ。」でも、おじいさんは、もうやめられませんでした。そして、ある日、外へ行ったおばあさんが帰って見ると、家一杯に金貨の山ができていました。そして、おじいさんの姿は見えませんでした。「おじいさあーん、おじいさんヤァイ」、おばあさんはさげびましたが、答えはありません。でも、どこかで音がするのです。音がする方を見て、おばあさんはたまげました。金貨のお山のてっぺんで一寸法師のようになったおじいさんが、いまは、とめるすべもなく、チャリン、チャリン、と金貨を生み出しながら、宙にとんでいたのでした。」オワリ

誰が、いつ、作った話かは知りませんが、GNP第二位の国民が矮小になりつつあることと無関係がどうか——。あなたは何を感じなさるでしょうか？

第二の面は、対人面だ、と申しました。物質的繁栄を一途に求めてきたようにさえ見られ

るこの国には、すばらしい「教育基本法」という法律があるのです。そして、その中に「教育の目的」という一条があります。それはつぎのように明言しているのです。

第一条 教育の目的

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行なわれなければならない。」

何とすばらしい文章でしょう！教育は人格の完成を目ざしているのだそうです。とすれば、その教育行政を指導される政府の方々は当然そのよき模範となってくださるのだと思います。ああ、それなのに、それなのに、そのえらい方々はピーナッツをたくさん召し上がり、パーティー券を購入され、ある人々は自殺をされ、その上の方々は、何もご存じないほどに賢い方々なのです。

どこに、人格の完成図を見ることができるのでしょうか？どこで、そのような教育が実践されているのでしょうか？

教育の場では、少くも四つのことがなされるはずであります。

1. 事実についての資料、情報の提供
2. その事の意味、解釈（これは、世界観、歴史観、その他の考え方です）の提示
3. 技術訓練
4. 人格の育成

日本には、大変残念なことです。建前と本音の間に相当なへだたりが存在しえます。そして、この人格形成の基本的な作業を担当する教育の場でも、その距離は縮められてはいないのです。ですから、最高教育をうけた、最高の学歴を持つ方が人格者であるという保証はどこにもないのです。学歴が保証するものは、社会での立場、それにとまなう収入かもしれないませんが、人格については、何とも言えないことになるのです。

すさんだ心を持つ人々の間に住んでいれば、自分の心もひからびてきやすいではありませんか。だから、三木清が言ったことはほんとうになるのです。孤独は山になく、町にあるのです。山に行けば、静寂が漂い、寂莫が満ち、静謐を楽しむことができるでしょう。

（最近では、こういう表現ははやらないようです。ぜいじやく、せきぱく、せいひつ、と漢字を考えながら話しをするのですが、多くの学生はひらがなで聞いているか、漢字でない「感じ」できいているので——）山で会うのは梢のカラスぐらいでしょう。カラスと人生を論じますか？「おい、カラス、現代日本人のなやみがわかるかい？」、おそらくカラス君は「バカー!？」と鳴いてとんで行くことでしょう。

町には人が満ちています。でも、みんなが重荷を担い、痛みを持ち、傷つき、なやみ、疲れ、いらついているのです。ですから、その人々の間にいるとかえって孤独を感じるのです。満員電車は孤独集団の機械的移動のようなものでありませんか。曲ったまま伸ばせないからだ、前の人の中へ押しつぶされる鼻、手を放してもかばんはちゃんとささえられている。みんな人なのに、各々なやんでいる。それが毎日つづくのですから、都会の中で生きる人は疲れ果てても当然でしょう。

職場で働きながら、創造的な生活をよろこんでいる人は次第に減りつつあります。機械化がもたらした産業社会の悲哀がそこそこに見られます。

家に帰って、建設的な、実のある会話を、平和で喜びのあるムードの中でたのしむ人々がどのくらいあるのでしょうか？ながめておられるテレビの番組の何パーセントが、心にうるおいをもたらすものなのでしょうか。

何かが根本的におかしいのではありませんか？それは、教育基本法でしょうか？経済的な繁栄なののでしょうか？どうもそういうものではなさそうです。むしろ、お互い、人間そのものの中に、何かがずれているのだと私は思われているのです。

だれだって、いつもカリカリして、どなり分っていたくはないはずです。にらみつけている目に出会うよりは、ほほえみにあふれたまなざしにふれるほうがいいのです。手をあげてなぐるより、手をさしのべて握手したいのです。にもかかわらず、人は、憎み、恨み、怒り、争い、傷をおわせ、傷ついているのではないのでしょうか？やっぱり、どこかがずれているのです。だから人間関係はむづかしいのです。人一人の内側に問題があれば、その人々があつまれば、問題もふえよう、というわけです。ですから、社会問題の根本に個人問題があることになり、その個人問題の中心が、あの三角形の第一面にある、ということになるのです。

第一面は、対神面と中し上げておきましょう。これは、単に精神面とか心理的側面というよりも深いもの、また高いものだ、と私は思っています。要するに、何を自分の神とするか、という事なのです。誰か、あるいは何かを神として信じるということは、その人の一番基本的な問題なのです。その決定は、その人の価値基準を決定します。人生の方向も、目的も、生きざまも、およそその人の人生のあり万全般を決定すると言っても過言ではありません。ある国の文化を知ろうとしたら、その国の代表的宗教、信仰生活を知ればよい、と学者が言われるのはほんとうです。

その人の信じる神は、その人の人生の地平線をきめるのです。というのは、人は自分の神をこえることができないからです。その人にとって、その神は絶対的存在になるのですから。石を自分の神とする人は、自分を石以下にするか、せいぜい石と同じだと見るようになります。動物をおがむ人は、動物に束縛されるか、動物程度にしか生きません。ですから物質崇拝をしている人は、当然、物に仕える生き方をするようになるのであり、物のために一生を費やし、物のために死ぬことになるのです。ある思想を神格化すれば、そのためにいのちをかけ、国家を神にすれば、その国のために生きる事が人生のあり方になるのです。

世界の人々が拝んでいる神々は、何とまあ多種多様なことでしょうか！日本にある神とは、やおよろずの神、といわれるように八百万もあるのかもしれませんが、けれど、その神様方は、どうやら人間様がおつくりになった人工神ばかりで、人をこえているものではありません。だから、その創造者の人間様をお助けくださることができないのです。ですから、おのずから「知的・理性的」存在である、と自負する方々、努力すれば必ず成功する、と信じる方々、要するに「自分を神にする方」は、人のつくった神は要らない、と思われるのです。これには私も大賛成なのです。

人が神を造り、その造った神に助けを求める、というのは何とも珍妙な、自己矛盾もいいところ、という感じがするのです。

年始、ある神社（東京にあるきわめて有名な神社）に初もうでの人々がワンサと押しかけました。番組の取材に向った私の仲間とその参拝客との一問一答はこんな風でした。

「何をお願いしに来たんですか？」 「あ？俺？今年入試だから、合格を……」

「アナタは？」

「ちょっとサ、いま、カゼ引いてっから…」

「アナタは？」

「仕事、仕事、とにかくこう不景気じやサ、こまるんだナァ！」

「それで、お預いした事はきいてもらえますか？」

「サァナ？わかんねエナ、ナンシロ、こんなにタクサンの人じやん？」

「ま、イイノ、イイノ、おさいせん十円だからサ。」

これは、実際の会話なのです。神様はいてほしい。人の力の限界のかなたから手をのべて助けてくれる神様がいてくれて、こっちを向いていてもらおうと大変都合がいいんですよ。だけど、ほんとは、多分、そんな神様はいないのです。でも、いることにしておくほうが、何だか気休めになるから。

こんな風に考えることが多いのではありませんか。でも、さて、誰サマを信じようかと思うとあんまり多くて。ですから、できるだけ「たたりのなさそうな、無難な神様？にしておこう、という方もありますし、近所づき合い上、こっちにしとこうや、などということにもなるのでしよう。

教会に行くと、子供たちがうたっています。

マコトの神様、ただ一人

みなさん、はあやく信じまショ！

真（マコト）の神様。この表現自体が全くおもしろいのです。神は真理である、と思う人にとっては、それ以外、つまり、絶対な真理以外を神とすること自体が実におかしなことに見えるのです。でも実際のところ、人々が神々を造ってしまったのですから、「ほんとうの神様は…」なんて言うことになるのです。

聖書にかかれてある神様は、真理、絶対者、創造者、愛、聖い方、などといろいろ説明されています。そして、この方は人をも含めて、すべてを造った方だから神々の上におられる神である、と教えているのです。

ある方は、聖書というのはずいぶん大きなことを言うなあ、そういう絶対的主張がこまるんだよナァ。それこそ身勝手というもんじやないかい？そんな強引なことは言わないで、私も神々のお仲間に入れてください、とか言えば、かえって奥ゆかしくていいんじゃないかな？などとお考えのようです。

でも、真理は真理、ほんものはほんものなのです。これは、水かけ論ですから、いまはやめておきます。

ただ一つだけ考えておくことにしましょうか。たくさんの宗教がある日本なので、これは考えるに値しましょう。宗教比較をされる時には、少なくとも五つの点についての、おのおのの宗教の主張と実際を見るのがよいのです。

1. 起源—その宗教は歴史上のいつ、そしてどのようにして始まったのか？
2. 権威—その宗教体系の一番上にある権威は何か？あるいは誰か？
3. 教理—それはどんなことを教えているのか？歴史について、世界について、人について、物について、そして、神自体について。
4. 目的—その宗教は、何のために信じるようにすすめるのか？
5. 結果—信じた人、その人々の集団、時には社会、国家は、どうなるか？

この五点を正直に、公平に比較してみれば、自分の人生の問題の解決を与えるのは何かが、無理なしにわかってくるのではないのでしょうか？そして、いま、ご自分が信じている神が、あなたの霊、心、からだ、生活をどのようにしてくださるかが見えてくると思うのです。人を人らしくしない神は、人以下の神にちがいませんでしょうか？

私たちが、豊かさの中で乏しくしか生きられないのは、実に、この逆三角形の生き方をしてきたからなのです。①→②→③のはずなのに、③→②→①だと考えてきているところに、人生のむなしさの原因があるのです。ある方は③→②でおしまいなのかもしれません。その時は、上の一面はないのです。まるで屋根のない家に住んでいるようなもので、雨がふったら、水びたし、ごみも入れば、ほこりも舞いこむ、それが下にたまって、くさってくる、こんなことは、誰も願ってはいないものなのです。ある方は、「そんな事はないさ。ちゃんと神様をおがんでいるよ。」とおっしゃる方もおられましょう。問題は、その神様は、ほんとうに、信頼できる方なのか、ということなのです。人が造り、人が教える、人と同じかそれ以下の神様ではこまるのではないのでしょうか。

聖書は世界のすべての人に、ほんとうの神様を伝えてきた本なのです。ですから、いつでもベスト・セラーだったのです。その教えを少しご紹介いたしましょう。

聖書が教えること

四十人以上の人々が、三つの国語を使って（ヘブル語、アラム語、ギリシャ語）、1600年もの間にわたって書き、まとめられた聖書。旧約聖書三十九巻、新約聖書二十七巻（これは三、九、二十七、あわせて六十六、とおぼえるといいのですが）、1,189章から成るこのおどろくべき世界のベストセラーが教えることを、チョコチョコとまとめることなど、浅学非才の私などにはとてもとてもできることではないのです。でも、ここで、中心的なことだけはのべておきたいと思います。学べば一生かかる本です。いや、一生ではおわらないものです。ですから、それは、みなさんにおまかせしておきます。教会へいかれば、牧師、教師の方々から学ぶことができます。（あなたのおすまいの近くにも、聖書をきちんと教えている教会があると思いますので、ご連絡くだされば、こちらからご紹介いたします。）

聖書の中には、いろいろなことばがあります。聖書は、書、章、節、というようにわけら

れています。ですから、あることばをさすときに、「何々書の何章何節のことば」という風にいます。で、その一節を、よく「句」とよびます。そして、それが聖書の中の一句なので、聖句、という表現を使うことが多いのです。

さて、私がここで引用することば、聖句は、新約聖書、ヨハネによる福音書、三章十六節、なのです。これが、それです。

「神は実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは、御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネの福音書三章十六節）

この句は、短いものですが、大変包括的なものです。宗教改革者、そして、近代をもたらした大人物の一人と言われるマルチン・ルターは、この聖句の中に、六十六卷の聖書の教えがまとめられている、だから、この一句が保存されていれば、六十六卷が失なわれるようなことがあったとしても（こんなことは決しておこりませんが）、聖書の中心的な教えは失なわれないであろう、というように言った、と伝えられているほどなのです。

それで、この聖句が教えている四つのことを、ここでとり上げておきたいと思うのです。

1. 愛してくださる神
2. 愛されている世（人）
3. 神が与えられた御子（キリスト）
4. 信じる人におこること（救）

これらの四つを、順を追って考えてみましょう。

愛してくださる神

「人は愛されて安息し、愛して満足するものである。」このことばは、数少ない(?)私の名言(?)のうちの一つなのですが、ぼんとうにそうだと自分で思っているのです。

ウィリアム・グラッサーという精神医学の先生が、おなじようなことを述べています。彼は、人には基本的な二つの願望があって、それらが満たされるまでは、他のいろいろな願望が充たされても、安心しない、というのです。そして、その基本的な二つの願望というものの一つは、自分は存在している価値がある、という事を自分自身ははっきりと納得をしたい、というものであり、もう一つは、自分は愛されている、と思えること、信じられること、感じられることだ、というのでした。

どうやら、これは、普遍的なもののようなのです。貧乏でも、愛し合っている家庭は、たのしいものです。逆に、ないものはありません、と言えるような、お金持ちの家に生まれて育っても、愛されていない、と思っている人は、不幸を一身にせおっているようにしか生きられないものなのです。この点で、正に人は対物的な存在ではなくて、対人的な存在なのです。

ところで、この「愛」ということばの意味なのですが、人によって、意味合いがまるでちがうのです。ですから、ある人がある人を愛している、と言っても、一体何を言っている

のかわからないことがおこるのです。よく週刊誌の表現に「愛の破局」というのがあります。これは全く矛盾にみちた表現なのですが、それが平気でまかり通れるのが日本なのです。矛盾？なぜ？愛は永遠のものなのだ、と知っている者にとっては、破局はありえない、ことになるでしょう？でも、この表現がうけとられるということは、逆に言えば、「あのような愛は破局に至りうる性質のものである。にもかかわらず、人はそれをすら、愛とよぶ。」ということになるのです。われわれは「愛する」という表現はあまり使わないのです。でも、使われている場合をよく見聞きして、分類してみると、どうやら、こんなことになりそうなのです。

愛する、とは——

1. 好きである、ということ。

これは、すこぶる自分勝手であって、自分の好みに合っている、というだけのことで、好きでなくなれば、それまでの関係はなくなるわけで、愛の破局に至るのでしょう。

2. 価値がある、ということ。

打算的な愛というのがこれでしょう。財産目あての「愛の生活」なんていうのはきわめて「非人間的で冷たいもの」ではないでしょうか？でも政略結婚は昔から、跡を絶ちませんし、学歴結婚、お家柄のふさわしさの主張なども、しばしば打算的になりえますね。気をつけないと「愛弟子」（まなでし）というのも、成績がよくて、よい研究をするからというのでは、たちまち消える愛を考えてつくられたことばかもしれません。

3. あわれむ、ということ。

これは、どうも上下関係、優劣関係の間で上から下へ、優れた人から劣った者へという方向づけを持つものであるようです。「下から上に」はむつかしいと考えられます。ですから、困った人のためには同情もし、もらい泣きをすることができても、成功者への拍手はおくれないのです。お隣の御主人の昇進をよろこび、お祝いでかける同期生社員夫妻があれば、それは特だねもの、かもしれませんでしょう？

4. 義務を果す、ということ。

結婚の中には三つある、と書いていた方があります。一、しあわせな結婚、二、こわれた結婚、三、しかたがなくそのままにしてある結婚、だそうです。親子の関係にもありそうです。幸福な親子、憎み合っている親子、あきらめている親子、などが。仕方がないから愛しているよ、とか、とにかく食べさせてやってるだろう、とか言うときは、愛とよぶに値しないと思います。

こんな愛ならザラにあります。同時に、こんな愛で愛されても人は安息できません。私たちが求めている愛とはそんなものではないでしょう。私たちが、かりにも愛されていると感じとれる愛は、そんなものではありません。そこには少くともつぎのような実質がなければなりません。

1. 理解すること。

たくさんの方々が「わかってもらえません」と言って、私のところに来られます。よく聞いてみると、わかってもらえないのは、話さないからなのです。なぜ話さないかと言えば、始めから、第一印象が悪くて、「話す気がしない」のだそうです。心を開く事ができません、と、たくさん若い方々がおっしゃいます。だから話さない、だからわかってもらえない、だから、さびしい。話したいのに話す相手がない、だから聞いてください、という中・高・大生や、若い方々にお目にかかる、あーア、何たることぞ、愛はいつこに消えゆきしや！と嘆かざるをえない昨今なのです。と同時に、ハテナ？じや、なぜ私のところに見えるのかナ？と考えちやうのであります。そして、ソウダ！たしかに、今の私は、この人々を愛しているんだ、少くとも「わかろう、と真剣に努力してはいるんだ。それがどこかで通じ合うものをつくっているんだ。」というに至っているのです。

2. おもいやること。

人は、実は、全部わかると都合が悪いこともあるものです。だから「適当に」わかってほしいのです。いや、いや、そうじやない、ほんとうは、全部わかってほしいんです。もし、わかってくれる人が自分の立場に立って来て、配慮してくれるならば、です。おもいやりがあれば、一緒に喜び、一緒に悲しんでくれるならば、全部知ってほしいのでしよう。愛はおもいやるものなのです。

3. うけとること。

多くの「愛」は条件つきです。「からの愛」（何々だから引受する）、「ならばの愛」（何々ならば愛する）はどこにもあります。「そのままを先ずうけ入れる愛」は、あまり多くないのです。でも、人は、そのままをうけとってもらえないと、向上して行こう、とする意欲さえ失ないかねないものなのです。失敗さえもうけとって、失敗しない人になろうね、といわれることと、一つの失敗をとり上げて、アナタはいつもこうなんだから、アナタは失敗者です！といわれるのでは、正に、天地の差があろう、というものです。

4. さとすこと。

何でもかんでもうけとって、まあ、まあ、なあ、なあ、では、人は成長しません。愛があれば、当然、忠言が生まれましょう。「あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。」とは、旧約聖書、箴言（しんげん）27章5節の教えです。最近、注意すらしなくなった親があるとは、よく言われます。そうすれば、必ず反抗するから、というのが、その時の説明ですが、愛の欠如のゆえである、ということではないのでしようか？

5. 最善を期待すること。

人には、かくれた可能性があります。愛は、そこに目をとめるものです。画一的な教育がしないことを、何人もの子供を持つ親の愛はしてのけます。人はおのおのちがうものです。その子の可能性を見つけて引き出すことこそ愛の仕事ではないのでしょうか。「ボク、ダメ。」、と吐息をもらす子は、他人と自分をくらべすぎているのです。「キミはキミ。それでいいんだよ、自分の中にあるものに目をとめてごらんよ。」ということは愛の励ましなのです。人の持つ最善をいつも期待するとこ

ろには、希望が生まれるものです。

6. 犠牲を払うこと。

最善を願って、最大の代価を払う。そこにこそ、愛の本質がキラリと光るのです。熱が高い、頭がわれるように痛い、苦しい。「イタイヨー、クルシイヨー」と泣きべそをかいている一年坊主は、よるおそく、ねむいのをがまんして、枕許にすわって、氷をわって、氷枕をかえてくれる母親の姿の中に、そのキラリの一瞬を見たりするのです。「なんにもなくてごめんなさいネ。」と言いながらも一生懸命やりくりをしてととのえられた夕食を前にして、「イヤァ、いいんだ、いいんだ、ウマソウだナァ、これがしあわせってものよ」と顔をほころばせる。そういった夫婦の間には、先づは破局はこないものだと思いますか。犠牲を伴う愛—これはほんものなのです。だから、私は十字架のキリストを心から愛しているのです。だって、彼は、私のためにいのちをすててくださったのですから。

聖書の中に「愛」をうたったところがあるのです。

「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいドラや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。」（新約聖書第一コリント十三章より）

すばらしい愛の定義、愛の評価ですね。

さて、問題は、こういう愛はどこにあるのか、ほんとうに、こういう愛で、自分を愛してくれる人ってあるのだろうか？ということなのです。実際に、そういう人に出合わなければ、愛は、相変らず画餅になってしまいます。

うれしいことに、いや、ありがたいことには、ほんとうにあるのです。こういう愛をもってわれわれを愛してくださる方が。

神は——世を愛される、のです。

聖書は、そのように、宣言しているのです。

愛される世

神が愛しておられるのは「世」です。この「世」というのは、人のこと、つまりは、あなたや私のことなのです。現代の社会では、人が人として考えられなくなっている、とよく言われます。疎外されている、という表現はそのことを示しているのです。人の商品化とか、機械化、というのも同じような状態を示す別のことばです。機械だから、別の部品と取り替えることができるのです。「もうダメですね、ハイ、では、別の人と変わってください。」こう言われて退職させられる時は、いくら「人間機械論」を主張する方も、いい気

持ちはしないのではないのでしょうか。商品なら、売り買い自由でしょう。値段の高い方に買われていくのが、むしろ、道理というもので、使命意識をもって、とか、愛社精神を、なんていうのは、フルイ、フルイ、と、こうなるのです。

そのような社会にふれつづけていると、人は満身総瘍（まんしんそうい）、傷だらけで生きることになるのです。そこでは、愛されている自覚さえ、失なわれかけて行くのです。そのような人の姿を、聖書は「滅びつつある」と表現します。このことばは原語ギリシヤ語の訳文ですが、原語の意味は大きく四つあります。それらは、たしかに人の姿をよく描き出しています。

1. 失なう。

人はたしかに、大変重大なものを失なっています。目的を、平安を、喜びを、希望を、愛を、充実感を、生きがいを、そして時には生きる意欲さえも。このように多くを失なった人に出合ったら、あなたは、その人を愛するのでしょうか？あなたが、むなしく、不安で、悲しげで、失望、落胆していて、フラフラと人生を歩んでいるとしたら、誰かがあなたを愛することを期待できるのでしょうか？でも、神様は、そんな私やあなたを愛しておられるのです!?

2. 迷う。

人は、いまでも変わらずに、山のかなたの空遠くに、さいわいを探しているのです。涙さしぐみ帰ってきて、山のかなたのなご遠く、を、わびしく見つめるのです。そして、そこ、ここ、と、幸福の青い鳥を探して迷うことが多いのです。このように迷っているのは、何も、この世での敗北者や落後者といわれる人々とはかぎりません。成功者は成功者なりにかえって深刻なものなのです。こんなに成功しているのにむなしいのはなぜか？このほうが、もったきびしい迷いではないでしょうか

3. 浪費する。

人はいろいろなものをムダに使います。省エネ時代とはかけ声ばかりのように、資源の使いすてがみられると思うのは、貧乏性の私のヒガミでしょうか？でも、もっとおそろしいのは、人生そのもののムダ使いです。一回しかない人生の時間が無為（むい）に流れて行く。しかも、それにも気づかない。これは、もう、一つの浪費病のようなものです。その時間を自分の人格形成や人々を助けることのために使ったら、どんなに充実した人生がおくれるか、を思うと、寒心をおぼえるのです。きょう一日は、よい日でしたか？

4. 破壊する。

世の中で一番悲しいのは人が人を破壊することです。国家間で行なわれる戦争から、営利目当の殺人、あるいは、そこまでは行かなくても、けんかや家庭内のいざこざまで、人が、同じ人を傷つけ合うのは何とも忍びえない思いをおこさせるのです。ある人は、自分自身をさえ、破壊しています。悪習慣を身につけて、自分の心とからだを損なう人が何と多いことでしょうか。それはその人の自由です。でも、自分で自分をこわしているのだ、と気がついた時、人は、その愚かさに呆然とするのです。それはついには麻薬使用にまで行くのです。その悲惨さは知る人ぞ知ります。そして、ついには、永遠の滅びへと自分を追いおとして行くのです。

人格の完成をめざし、真理と正義を愛する人を育成する事を期してなされている学校教育の最高学歴を得ている人々が、わいろを使い、人をおとし入れ、ある人は自から死をえらび、他の人は何の反省の色も見せない、となると、何をか言わんや、なのであります。

このように考える時、私は、そのような人をさえ愛しておられる神様は、正に人をはるかに越えておられる、としか考えられないのです。私たちは、時には、いや、しばしば、自分の事はたなに上げて、人の悪を責め、さばき、正義ぶるものです。でも、聖書が教える神は、このような「滅びつつある人」を、愛しておられる、というのです。しかも、単なることばによる愛の告白とか主張がされているのではなくて、自から、人となって人間の中に住んで、この愛の実践をされた、というのです。そして、その、人となられた神こそイエス、キリストとよばれる方なのです。

神が与えられた御子（キリスト）

聖書が教えることの全体を、キリスト教、ということばで表現してきたのが、日本のクリスチャンの先輩でありました。私は、個人的に、この表現はどうも不適切だ、と思えてならないのです。それと同時に、教会、という表現もです。両方共、「教」という字が入っています。で、われわれは、「教会」とはキリスト「教」を教える会である、と考えるのです。そう書いているのですから、そう思うのがあたりまえでしょう。しかし、教会と訳されているギリシャ語はエクレスヤ（エクレーヤとまちがえないでください。エクレーヤはお菓子の名前ですから）で、その意味は「呼び出された人々」なのです。要するに、神様の呼びかけをきいて、それに応じ、神が与えてくださった救主、キリストに従う事に決めて、一緒に生きて行こうとしている人々の集合がエクレスヤなのです。その人々の中心には、キリストとよばれる一人物、あるいは、一人格存在がおられるのであって、単に知的に理解し、同調するように求められている教理や教訓があるのではないのです。ですから、「クリスチャンライフの中心はキリストご自身である」というトレンチ監督のことばはきわめて妥当なのです。

さて、このイエス・キリストですが、その方は、とにかく、世界歴史に大きな、大きな影響を与えられたので、その方の誕生を記念して、歴史は二分され、紀元前・紀元後という、いわゆる西暦が生まれました。1980年というのは、キリスト誕生（正しくは、降誕というべきです）から1980年たったと言っているのです。世界歴史を二分したこの人は、あるいは、この方は、一体どんな方だったのでしょうか？

この質問に対して答えているのが、新約聖書の冒頭にある四つの福音書なのです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、という四人のキリストのお弟子さんたちが、いろいろな角度から、この方の生涯を記録した文書が、いま福音書とよばれているのです。ですから、この四冊の本をおよみになれば、この方のほんとうの姿がわかります。私は、みなさんによくわかって預けるように、とあって、別の本で、その方のことを書こうと思っているので、ここでは、ほんのいくつかの事をのべておきます。

イエス・キリストは、パレスチナの中のその当時ユダヤ地方とよばれた処で生まれました。南の方です。生まれた町の名はベツレヘム（パンの家という意味です）で、首都、エルサ

レムからさほど遠くない町でした。彼は、誕生後、北方ガリラヤ地方のナザレという寒村で育たれ、三十才の時から、公けに、いま風に言えば、巡回伝道者のように、町々を歩きながら、人々を教えたのです。もっともいわゆる勉強を教えたものではありません。神の国の事、神と人との関係のこと、人の問題の中心にあるもの、罪、死などについて、ほんとうのしあわせについて、などを説いたのです。

同時に、彼は、えらんだ十二人の弟子と共に、人々を訪れ、病人をいやし、悪霊を追いだし、なやむ人を慰め、くるしむ者を助けて行かれたのです。人々は、彼の助けを大喜びでうけとりました。が、彼の教えることに全面的に従おうとはしなかったのです。得になることは何でもうけとり、損な事はいっさいご免こうむる、という人々は、昔も今も変わらず多いのです。

その当時の政界、財界、宗教界の指導者はいろいろな意味で、このキリストの言行に反対しました。正義の声はいつでも反対者に出合うでしょう。その人々は、ついに、このキリストを十字架にかけて殺してしまいます。こうしてキリストは短い三十三年間の生涯を悲劇的な死を以てとじたのですが、墓に葬られて三日目によみがえったのです。その記念日が復活祭、イースターとよばれているのです。

そして、復活されたキリストは昇天されたのですが、復活後五十日目に、聖霊をおくられ、いまも、キリストを信じ、うけ入れ、従う人々の生涯の中心に住まわれその人を新しい生き方へと導いているのです。ですから、いま、この時でも、あなたが求め、願いさえしたら、目には見えず、手でさわることではできなくても、実在されるキリストは、あなたの人生を根本から変えることができるのです。そのような変化を普通、救いとよぶのです。先きののべた「滅びの状態」は、一般的に罪の状態とよばれます。キリストが与えるのは、その滅び、その罪からの救い、ということになるのです。

信じる人におこる事（救）

救ということばの基本的な意味は、解放です。解放の必要な人は束縛されているということになります。そして、人はみな、何らかの束縛を体験しているものなのです。体が束縛されていれば、病気なのだ、と言えるでしょう。心が束縛されていれば、不安であったり、ゆがみを生じたり、無力だと思ったりするでしょう。霊が束縛されていれば、ほんとうの神が見えず、永遠の世界が把握できないでしょう。救われる、というのは、こういういろいろな問題から解放されることを意味するのです。

キリストを信じる者は「滅びないで永遠のいのちを持つ」と教えられていましたね、そうです。あのヨハネの福音書三章十六節の聖句にそう書いてありました。ですから、信じる人には二つの事がおこるのです。一つは「滅びない」ということ。もう一つは「永遠のいのちを持つ」ということ。先の方は、言ってみれば、「悪い状態から脱け出す」ということで、後の方は「いままで体験した事のない永遠のいのちとよばれるある生命実質を持つ」ことで、その結果、新しい生活が始まる、と主張しているのです。

人間は束縛されている、とさきに書きました。この事は、いろいろな別の表現で示すことができるのです。聖書の中にも、多くの表現が用いられているのですが、それは、また別

の機会に（聖書の研究のようなところで）説明することにします。その別の表現なのですが、それは、病気、やみの中の歩み、汚れ、罪、死、などなのです。そして、これは、ちよっと申しましたように、人間構造から考えてみるとわかりやすいと思うので、一応、図示してみます。図にすることは、理解を助けはするのですが、逆に、図では説明しきれないものまでもその中に押しこむという無理もありますので、その点は了解しておいてください。

前の方でふれた逆三角形をおぼえていますか？そこでは、三角形は一つでした。ここでは三重にかかれています。これで人間の三重性を考えておいてください。ある方々は、人間を二重構造、よく言われる心身の二つ、として考えられます。ここではその二重か三重かの議論はしないことにします。上からの矢印は神様からのいのちの流れ、とでもよんでおきましょう。

人が神様に求め、自分の問題や罪を認め、それを正直に神様にお話し、与えられるいのちをうけると、この矢印のように、神様からのいのちと力が、その人の全存在にふれてきます。ですから、体の病気はいやされえますし、心は解放されますし、霊は活かされて、神様との交わりが始まるのです。これとよく似た表現は、他の諸宗教にもあります。ただ、イエス・キリストしか与えることのできないものがあるのです。

それは、罪と死の問題の解決なのです。からだのいやし、不安の解消、仲直り、商売繁昌、幸運、などは、いわゆるご利益といわれることの中でよく言われることです。それらがほんとうにその宗教の信者の方々に与えられるかどうかは、よく知りませんから、ここでは論じません。しかし、それらが、かりに全部与えられたとしても、人間の永遠の問題、罪のゆるし、罪の性質のきよめ、心の汚れの除去、ゆがみの矯正、そして、死のかなたにある栄光に満ちた天国への希望は、キリストしか与えてはくさいません。なぜかというと、イエス・キリストだけが、人となられた神だからです。彼だけが罪のない人であったのであり、彼だけが人の罪の身代りになって死んだのであり、彼だけが死にうちかってよみがえった方だからです。そして、彼だけが、いまも生きていて、われわれの中心に住むことができる現実的存在だからです。

ですから、イエス・キリストを信じる人にはつぎのような事が実際におこるのです。これは体験されるので、おこったことにしておく、というのとはちがうのです。その体験がクリスチャンを喜ばせているのです。

1. 罪がゆるされている、とわかるので、良心的苛責から解放され、平安を心に持つようになる。
2. 神様が実際におられること。その方が愛の神で、イエス・キリストが言われた天の父であることが信じられるようになる。自分はその方に愛されている神の子なのだ、ということがわかる。
3. 永遠のいのちが内側から働き始めるので、いままでは知らなかった愛、よろこび、平安、希望、力、などを感じ始める。その結果、自分を愛することができ、他の人をゆるしたり、うけ入れたり、愛したりすることができるようになる。
4. 死が人生の終りではなくて、その先きに天の御国がある事が信じられるようになるので、死の恐れが消え、希望を持って生きる人になる。

5. 体も力づけられ、病気の人、その治癒がおどろくほど促進される。(神によるいやしについては別に本をかきます)
6. 当然のように、対人間係が変り、仕事の上にも祝福が加わるようになる。
7. 人生の生き方が、自己中心から、神中心になる。具体的には、問題をおこしてきた人が、問題を解いてあげる人になる。

これらの事が、深い深い霊の世界から始まって、外へ広くひろがっていくのです。これはほんとうにすばらしい人間改革なのです。クリスチャンは、それを「新生体験」とよぶのです。

ここで、信じる、ということをもう少し、説明しておきましょう。「信じる者は」と書いてあって、それが条件のような、鍵のようなものですから、それをまちがえると約束が実現されず、宝の箱があかないこととなりますから。聖書が教えている「信じる」というのは、よくわれわれが考えていることとはちがうのです。ですから、時々「信じたけれど救われなかった」という表現をきくのです。そんな事がおこるはずはないのです。それはちょうど、「ご飯をたべたけど胃の中に入らなかった」というようなもので、決しておこりはしません。その人は、きっと、たべようと思ったけどたべなかった人か、たべた事にした人か、であって実際はたべなかった人にちがいないのです。

それでも、なおかつ「信じたけれど、何もおこらなかった」と言われる方々にお目にかかる事があります。よく伺ってみると、その方が考えておられる「信じる」ということは、聖書で教えていることとはちがうのです。ですから、その人は「信じていると思っていたけど、信じていなかった」ことになるのです。それなら結果が伴わなくても仕方ありません。そのような事のないように、ここで、できるだけわかりやすく「信じる」とは何か、を説明しておきます。

1. 信じるとは、つぎのことではありませんから、おまちがいなく。

- ① 事実と反して、思いこむこと。
- ② 何かの行事にたずさわること。
- ③ ある主張に同意すること。
- ④ そうなればいいなあ、と考えること。

これらは、よくあるのですが、まちがった「信仰観」なのです。

2. 信じる、とはつぎのように説明することができます。

- ① 知ること—これは、何を信頼するのかをはっきりさせるために、どうしても必要です。何でもいいから一生懸命信じればそれでいい、ではありませんから。
- ② 肯定すること—ああ、よくわかりましたよ、でも、そうだとは思いません。と言う人は、もちろん信じられませんでしょう。
- ③ うけとること—これは、わかって、肯定した時、そう決めて、そのように生き、行動することなのです。その面では、人は信じれば必ず行動する、ということが出来ます。

さて、あなたが、こういう意味で、イエス・キリストを信じられたら、必ず、救われることとなります。聖書は、そう教えているのですから。

さあ、ここで、もう一度、ヨハネの福音書三章十六節をよみ直してみてください。ただし、今度はその文章の中で「世」、「者」に「自分の名前」か「私」と書き直して読んでみてください。こんな風に。

「神は実に、そのひとり子をお与えになったほどに、私を愛された。それは、御子を信じる私が滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

永遠のいのちは、目には見えません。しかし、キリストを信じる人の存在の中心に、心の中に、与えられるいのちであって、必ず、その人を内側から変えて行くものなのです。

このいのちを持った方は

「生まれてきてよかった」「生きてきてよかった」と思われるにちがいありません。そして今までしてきた苦勞の意味が、おわかりになることと思うのです。「あれもこれもムダではなかった」とほっと一息ついていただけると信じています。不条理に見えた人生の諸問題が、実は、愛と知恵に満ちて、すべてを支配しておられる神のみ手の中であって、許されているのであり、またそのみこころによって運営されていたのであることに気づかれることでしょう。

さらに、今までがそのようになされてきたのなら、将来もまた意味深く導かれて行くのだと信じられるようになり、望みがわいてくるでしょう。

X X

第二次世界大戦は、もう昔物語りになりつつあります。でも、その中を通過して、いまの時代に生きている人にとっては、過去のこととは言っても、しごくなまなましい現実だったのです。

その戦時中に、当時、海軍兵学校とよばれた、海軍の士官養成学校に行った一人の少年がいました。彼は、愛国者の一人として、いのちを捨てる覚悟で、海兵になったのです。でも、その戦争は、日本、彼の祖国、の無条件降伏で幕を閉じたのです。彼は、それから、たましいの放浪を始めました。目的を失ない、心の平安を失ない、生きる意欲や力を失なって。彼は、一年浪人してから、一応、望んだ大学に入りはしました。しかし、心の中の空洞を埋めるものはありませんでした。暖かい家族の慰めや励ましも、彼の心を満たしはしませんでした。大学での勉強、クラブ活動、仲間との交友も、彼に充実感を与えはしませんでした。表面的には、ぼがらかに、元気に生きていた彼の心の中の痛みを、誰もわかりはしませんでしたし、わかったとしても、その痛みをとる事はできませんでした。

その青年は、ある日、キリストの話をきいたのです。そして、そのキリストを、自分の救主、主、として信じ、うけ入れたのでした。彼の生活は、まさに、一変してしまいました。喜びが心にわいてきたのです。自分の心の中のひずみがなおってゆくのがわかりました。いままで持った事のない愛が心をうるおし、あふれて、他の人々にふれて行きました。

彼は、心一杯、人生を喜んで生きる人・になったのです。その時の青年が、今、この小冊

子を書いてあなたに語っているのです。

そうです。あの時のさすらいの少年、悩みの日々を過ごした青年が、いまの私なのです。あの時、私が、今ここに書かせていただいた福音（よきおとずれ）を聞くことがなかったら、そして、イエス・キリストとの出会いを知ることがなかったら、あの暗いままの人生を砂をかむ思いで過ごしてきたらと思います。

あるいは、今アナタも、私のあの時のように人生を苦しんで生きておられるかもしれません。そうでしたら、あなたもぜひ、新しい人生を見つけてほしいのです。そして、どなたかに祝福を与える人になってください。

あなたと、あなたのご家族の祝福を、心からお祈りしています。

新井宏二

この豊かないのち、永遠のいのちを信じうけ取りたい、と思われる方のために。

聖書には、新しいいのちの体験をするために二つのことをするように教えています。

一つは「悔改めること」、であり、もう一つは「信じること」、です。これらのことばが意味していることはつぎのように説明されます。

「悔改める」とは、「方向を変える」というギリシャ語の訳語で、三つのことを含みます。

1. 罪を認めること。
2. 罪をおわびする、告白すること。
3. 罪をすてる、あるいは、やめること。

「信じる」は、前に説明しましたが、やはり三つの面があります。

1. 理解すること、わかること。
2. 肯定すること、同意すること。
3. そのようにうけ取り、信頼すること。

これらの事を、全部含めて、神様に祈る、あるいは求めるとしたら、このように祈ることができます。

「天におられる、イエス・キリストの父なる神様、あなたが、この私を愛していただきることを感謝します。私は、聖書が教えているように、滅びつつあることを認めます。この状態から救ってください。悪かった、と思うことはおわびします。イエス・キリストが十字架にかかって、私のすべての罪をゆるしてくださった事を信じます。いまから、私は、人生の方向を変えますから、正しい方向に進むことができるように助けてください。いま、私の心の中に、イエス様が住んでくださり、新しい生き方を始めさせてください。あなたは、ご自分のなされた約束を破らない方ですから、きっと、私にも永遠のいのちをくださった事を、いま、信じます。

同じように、あなたを信じている人々に、どこかで食えますように。助け合い、励まし合
って、この人生を力づよく生きられるように導いてください。
イエス・キリストのみ名によって、お祈り致します。アーメン」

(アーメンとは「真実」という意味のことばでヘブル語です。もともとは「たしかである、
堅くする」ということを意味していることは、祈りのあとにつけるときは「そうありま
すように」「そうなりますように」という意味で使われています)

あなたが住んでいらっしゃる近くの近くにも、聖書を信じている教会、イエス・キリス
トを中心にしてあつまっている教会があると思います。一度、ぜひ、おたずねくださるよ
うに、おすすめいたします。

もし、おわかりにならなければ、こちらにご連絡ください。ご紹介いたします。
神様からの祝福を祈ります。